

【夏合宿お題作文 テーマ…旅行】
素敵な三人組

春菜晴彦

○

揺れるつり革、唸る冷房。駆け足で過ぎて行く田園風景。

絶え間なく響く低い音と浅い揺れを感じながら、俺は繰り返し、繰り返し、世の不条理さを嘆かずにはいられなかった。

一体なぜ、なぜ……

○

現在我々を乗せた鈍行は、東北の片田舎と鎌倉を乗り換え無しで結ぶ唯一の交通手段である。この路線が開通する以前に鎌倉へ旅行しようとした場合は、わざわざ東京へ出向いたのち、いくつも乗り換えをしなければならなかったという。実に難儀である。それに引き換えこの路線、乗り換え無しで目的地まで行けるというのは大変にすばらしい。経済的にも、労力的にも。

ただ何事にも欠点というものはある。

この場合、金銭的逼迫や乗り換えの手間と引き換えに我々が獲

得したのは、有り余るほどの移動時間であった。何せ全線各駅停車。ただでさえ果てしない北国からの道中、全ての駅で停車するのに要する時間は推して知るべきというもの。そのくせ停車した駅で人が乗り込んでくる確率は半分にも満たないのだから、この路線が廃止されるのも時間の問題かと思われた。

慣れない旅路に辟易した俺は、ひとつ伸びを試してみた。

まあこちらも大学二回生の夏休みだ。金は無い。されど時間はある。考え方によっては、これほど俺達に向いている交通手段もないのかもしれない。そのような次第で我々は一路鎌倉への道をひた走っている。の、だが……。

ごう、とひととき大きな音が響き、車内が暗くなった。どうやらトンネルにでも入ったらしい。進行方向むかって左に広がる車窓が突如として黒一色に染まった。

頬杖などつきながら、それを覗き込む。

漆黒に染まった窓に映っているのは、物憂げにこちらを見据える大和美男児の姿であった。凛々しい眼光に太い眉が栄える。眉間にしわなど寄せてみれば、そこには渋く漂う大人の魅力が生まれた。

あらあら偶然飛び込んだ車内でこのような美男子と乗り合わせるなどなんたる運命、と己が幸運に感慨を寄せていた所、それは

鏡に反射した俺自身の姿であることに気がついた。おやまあまあ、現実とは何とも不思議なものだなあ！

果たしてかくのごとき生粋の大和男児たる俺が、である。

わざわざ『女性も可』と念をおした上で旅行に同伴する物を募つたにも関わらず、集まつたのが男だけとは。これを不条理と呼ぶに何と呼ぼう！

俺は「なにゆえ！ なにゆえ！」と叫びながら座席を思い切り後ろに倒し、満腔の憎しみを込めてぎうぎう押し込んでやった。

瞬間、後ろで「きゃあ」という悲鳴があがる。「や、やめてくれよう！」「止めぬ！」俺は間髪挟まずに叫んだ。

俺の後部座席に陣取っているのは同じ学部の同期生だ。言わずとも分かっていると思うが男である。もう一度言う。男である。

ならば遠慮する必要が何処にあるう。

「ふん。何故そこまで女性に拘るのか、理解に苦しむね」

「なにおうッ」

背中に込める力をぐいぐい増していると、横から冷やややかな視線を浴びせる人物がいた。俺は目頭に力をこめて奴を睨む。

彼の方とはいうと、なおも澄まし顔をしている。幼少から愛用している黒縁眼鏡をくいと押上げ「考えてみなよ」と言った。

「女性と僕らの違いなんて、遺伝子的には所詮一パーセント未満なんだよ。なら別に男でも女でも一緒じゃないか。きみは百円の

缶ジュースを買う時に、わざわざ一円単位で安い店を探すのかい」
むう、と俺は返事に窮した。

奴の言い分がわけのわからぬ屁理屈だというのはわかっているのだが、とつさに反論の言葉が浮かんでこないのである。

俺の反応に気を良くしたのか、彼はさらに続ける。

「そうさ。そもそも女なんてのは、本来無知なものなんだ。その証拠に、見てみなよ、あの無知無知した太ももを。くわえてあの不可不可した胸元！ まさに不可、不可といったところじゃないか。さらには意思が曖昧模糊だ。だから尻などあんなに模糊模糊して」

そこまで聞いていい加減煩わしくなった俺は、気持ちよく喋る彼の大口めがけて旅行用ガイドブックを詰め込んでやった。

彼は目を白黒させ、もこもことうめいた。

再びごうという音がして、明るくなる車内。照らされる俺達。

——空しい。

強く思った。

傍らにいたのが、後ろにおわしますのが、黒髪の可憐な乙女であつたら。いや可憐でなくともよい。せめて女性だったら。

「……恋したいなあ」

どうにかガイドブックを吐き出したらしい彼がぼつりと言った。

普段ならば「女など要らぬと言った舌の根が乾かぬうちに何を」と口汚く罵る所であるが、そのつぶやきあまりにも俺の内を華麗に代弁していたため、同意せざるを得なかった。我々は口々に「ああ、恋してえなア」「恋したいねえ」「うむ、恋したい」と言った。

恋したい恋したい呟く、男だけの三人組。端から見てもこれほど奇怪な一行もなかなか存在しないだろうが——まあ恋したいのだから仕方あるまい。素敵な三人組である。

この瞬間、散らばりかけていた我々の心は再び一つになった。

——さて、平生俺が（勝手に）心の師と称して止まない登美彦氏は、ある著書の中で次のように述べている。

「恋に恋する乙女は可愛いこともある。だがしかし、恋に恋する男たちの、分けへだてない不気味さよ！」

他人の言葉にこれほど深い同意の念を抱いたことは、無かった。

○

鎌倉の地はまだ遠い。

不気味な男達を背負った鈍行は、それでも優雅に軽やかに、我々を古の都へと導いてくれる。

願わくは我らに幸運あれ。

（おわり）

【引用…森見登美彦『夜は短し歩けよ乙女』より】